



地震後の大津波で壊滅的な被害を受けた陸前高田市。死者数、行方不明者数とも県内の自治体で最多。同市の中心市街地は一面にわたりがれきで覆われ、現在、その撤去作業が行われている。個人の住宅はもとより、企業の工場など同市の産業基盤を支えてきた施設も同様に壊滅的な被害を受けた。

しようゆめ店「株式会社八木澤商店」も社員、醸造、生産機器、原材料などすべての生産基盤を失った。また、社員1人も亡くなり、住宅を失った社員も多くなる。

八木澤商店は「ヤマセン」の愛称で、同市気仙町でしようゆめ、みその製造、販売までを行うしようゆめ店。創業は、1807(文化4)年と200年余りの歴史を持つ老舗で同市を代表する企業である。

「八木澤は終わった。町もなくなつた。何もかも終わった」と河野和義会長(66)は、同社のホームページに変わり果てた同社の状況を目の当たりにした時の感想を記している。そんな絶望の中、河野会長の長男、通洋さん(37)は「必ず再建する。だから社員は解雇しない。会社も町も復興する」と強く決意。父と再建方法について話し合い、再起をかけることを決め、それまで社長だった父が会長に就任し、自ら社長を引き継いだ。

始まった戦い

会社再建とはいふものの、まず行わなければならないのはしようゆめ、みそなどの商品の生産。すべての生産基盤を失った同社には、自力での商品生産は不可能であった。そこに秋田県の同業者からの「委託製造」の申し出。自社で行っている製造方法などのレシピによりしようゆめ、みその生産の目途が立った。

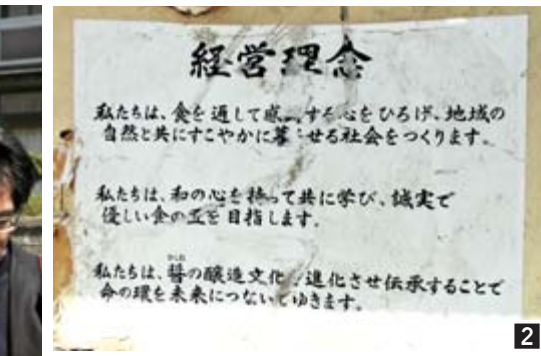
次に考えなければならなかったのが、店舗をどうするか。陸前高田市では、電気、水道な

どのライフラインがほとんど復旧していないため、市外に目を向けざるを得なかった。できるだけ同市から遠くない場所、いち早く営業を再開したいという思いから、大東町大原地区の空き工場を選んだ。その空き工場を4月7日に借りることにし、商品と店舗が整ったと思つた矢先、同日の深夜に発生した震度6弱の余震により、その工場は、「次の日におじゃましたら、天井から空が見えた」と河野社長が振り返るように大きな被害を受けていたため、借りることを断念。再開は振り出しに戻った。

そんな中、一関商工会議所大東支所から「摺沢に縫製会社、だった空き工場がある」との情報が入り、さっそく現地へ赴いた。社員が勤務するスペースとしては申し分のない広さであり、即決。「八木澤商店大東営業所」として営業再開にこぎつけた。

追い風を受けて

5月2日には、同営業所において「八木澤商店再開、営業



4 出発式で配送のトラックを見送る社員ら



5 真剣なまなざしで研修を受ける新入社員
6 被災した社屋から見つけたしようゆめ。商品にはできないが、どうしても捨てられないという
7 営業所開き出発式終了後、取材を受ける河野通洋社長(中央)と河野和義会長(左)いつでも社員が明るい理由の一つは、みんなで休憩し、何でも話すこととが

も減っているため、毎日、午後から業務に関する研修を商工会議所大東支所を会場に行っている。全国各地から寄せられた激励の手紙やはがきへのお礼状を書いたり、品質表示についての法律や方法を学ぶなど研修科目も多岐にわたり、真剣な表情で社員らは研修を受講していた。

今後の同社の課題は、陸前高田市での本社の再建。河野社長は「とにかく水のいい所に。水が変わると商品の味が変わる」と候補地の選定を急ぐ。「販売はできる場所から徐々にやっていきます」と現状を認識し、焦りはない。

大東営業所の玄関に同社の経営理念を記した若干汚れのあるボードが掲げられている。このボードは、津波で会社から7き離れた海岸で見つかったという。それも見つけたのが同社の社員。

八木澤商店の経営理念は、震災にも負けずこれからも受け継がれてゆく。

河野社長は、被災から52日目での営業再開について「いろいろな人の支援に心から感謝している。社員がいないと今日が迎えられなかったと振り返った。同社に4月から採用された、ともに18歳の村上愛季さん、細谷理沙さんは、「営業再開となり、とにかくうれしい」、「これからいろいろと勉強して仕事を覚えていきたい」と感想を語ってくれた。

「我が社の社員は、いつでもみんな明るいです」と河野社長が言う通り、新採用の二人も笑顔で答えてくれた。

起きた奇跡― 見つけた経営理念

現在の取引は、震災前の10分の1程度。おのずと業務量は

「激震から2カ月復興への思い」完